



病気を言い訳にしない 飼養管理 PART.2

伊藤 貢 (有)あかばね動物クリニック

前号では事故率5%までの農場のすべきことと、その優先順位について述べました。今月号では事故率10%以上となり、経営がいよいよ危うくなってきた農場について述べます。

人の管理(表1)、豚の管理(表2)、病気の管理(表3)も参考にしてください。

3) 10%事故率農場：このままでは危ない、今のうちに手を打つべき

①人の管理

死亡頭数もかなり多くなり、その状態での経過年数が増すとともに経営が圧迫されます。また、事故率の高さで経済性ばかりでなく、従業員のやる気も失っている場合が多いでしょう。豚が死ぬことに対して無関心になり、気にしなくなってきました。こうなると、15%以上の事故率はすぐ目の前です。転落していく危険な状況にあります。

また中途半端な死亡頭数のため、周囲が心配するほど経営者は焦っていないことが多く、実はそれが一番重要なポイントなのですが、本人は気づいていません。

最優先項目に『人の管理』をあげたのは、死亡させている原因が、病気ではなく経営者であることが多いからです。“もうあとがない”という危機意識を感じてもらい、強い意志を

表1 人の管理

会社の目標をもつ
各自、目標を立て、随時達成率を確認する
経営者は、人も豚も大切にす
気持ち良い職場環境をつくる
事務所は明るくきれいであること
快適空間をつくり、人が集まる場所にする
来た時、帰るときは、人にも豚にも挨拶をする
人が辞めない会社づくりを経営者は心掛ける
仕事以外で一緒になってすることがある

もって事故率の低下に臨むことが重要です。

②適正体重出荷

事故頭数が多い場合、事故豚のことで頭がいっぱいになってしまい、農場全体のこと、経営のことが考えられない場合が多いようです。頭のなかを次のように整理して下さい。「今いる豚を高く売ろう。売れる豚をつくろう。死んでいく豚は悪い豚だからもう気にしない」。

今いる豚を高く売るには適正体重(できれば枝重74kg以上)での出荷が必要です。また、タイプ別に出荷先も検討して下さい。現在の状態が続いている場合、経営的には苦しい状況が続いていると思われるため、入ってくるお金を少しでも増やすことを考えましょう。もし、豚が小さい場合には、頑張って1週間出荷を遅らせて下さい。

③種付け、再発確認

種付けは、毎日の仕事で一番重要な仕事に位置づけ、何があっても種付けだけはするように心掛けて下さい。生まれなくては出荷ができません。そして、再発、流産の確認を朝昼晩行い、ストール舎が暗い場合は明るくし、流産を確認しやすい環境を整えましょう。空胎の豚をなくす気持ちで種付けを行って下さい。

④育成豚の種付け

週または月ごとの育成豚の種付け頭数を常に確認しましょう。稼働母豚数を常に維持するのは大切なことです。繁殖成績や出荷頭数は、「今までやったことの結果」なので、これから先につなげる仕事を行って下さい。そのためには、産歴構成は重要であり、育成豚の定期的な繰り上げがポイントです。

⑤豚の管理

事故率が高い農場が清潔・きれいであったことがありません。きれいであるとすれば、事故が多くなってからまだ日が浅い状況だと思えます。豚が死亡すると、人間のやる気が失われます。これが病気の本当の被害です。

病気で悩んでいる人がよくいますが、病気の前に「人間」が問題である場合が多いのです。一口にやる気を出せと言っ

表2 豚の管理

畜舎の周りを綺麗にする
畜舎の通路を綺麗にする
ホコリをなくす
カーテン、天井などの破損をなくし、すき間風をなくす
適正密度
分娩頭数のバラツキを少なくする
豚の流れ
オールアウト
週単位、2週単位のパーテーション
豚房の洗浄・消毒・乾燥・空舎

ても、強い気持ちを持続することは難しく、豚の管理よりもはるかに人の管理のほうが難しいのです。

解決策の提示も難しいのですが、イメージとして、「職場に行くのが楽しくなるようにするにはどうすれば良いか」を常日ごろから考えて、人を観察すると良いと思います。楽しくなることを考えつくことが難しい場合は、逆に「どんなことがあったら嫌になるか」を考えても良いでしょう。汚くて暗い職場（豚舎）では行くのが嫌になります。

事故率と農場の散らかり度は相関します。豚舎の周囲のゴミや古いもの、使わなくなったものをすべて取り除き、その上に砂利を敷き詰めて下さい。見た目だけでもすっきりとした気持ちになります。ゴミとして放置されているものは、有害鳥獣や昆虫の住みかになることが多く、人間のやる気も失くします。マイナス部分ばかりで、プラスのものは何ひとつありません。逆に砂利を敷くと、農場が綺麗に見え、従業員のやる気も生まれてきます。ネズミ対策にもなります。

外観の次は豚舎内部です。はじめに手をつけるのは、通路の清掃です。通路は物置ではありません。ものを置くと、外部のゴミ同様、ネズミや有害昆虫の住みかになります。また、空気の流れも変えるので良くありません。

通路から病気を媒介する場合もあるので、豚舎で最初にきれいにして欲しい部分です。一番目にもつくので、ここをきれいにするると他の部分の汚れが気になり、掃除するようになります。逆にそうならないようでは、その農場で働いている従業員は失格です。

4) 15%以上の事故率：もうあとがない。経営を続けるかやめるか決断のとき

危機的状況であるため、今後のことを考える必要があります。既に数年以上、事故率15%ならば、経営をやめるか続けるかを判断する時期です。続けると決めたなら、3年は我慢して下さい。多くの場合、豚がすべて入れ替わるまでは、先

が見えず不安が続きますが、努力すれば状況は良くなっていきます。

①適正体重出荷

最初にするのは、資金をつくることです。前述のように適正体重での出荷、肉豚のタイプに合った出荷先を選定しましょう。資金繰りが苦しいと思いますが、じっと我慢して肥育豚は大きくしてから出荷します。出荷体重が小さいと格付けが悪くなり、と畜場での評価が落ち、相乗的に売上高が少なくなります。

②育成豚の種付け

稼働母豚の確認と素豚の確認をして下さい。稼働母豚数を常に維持することは、経営上重要です。候補豚が少ない場合は、一時的には、肉豚から繰り上げるのも1つの方法だと思います。肉豚から上げた母豚はできるだけ早い段階で淘汰して下さい。あくまでも緊急的な対応です。

③種付け、再発の確認

空胎の豚をできるだけ早めに見つけ、種付けします。稼働母豚数が少ない場合は、多少高産歴でも種を付けましょう。稼働頭数と種付け頭数を維持して、遊んでいる豚を少なくすることを心がけます。

④人の管理

全員が危機感をもって仕事をしていることを確認しましょう。もうあとがないことを真正面から受け止め、何事にも気を抜かず当たります。目標を立て、週ごとに確認します。全員で力を合わせて病気と闘う強い気持ちを共有することが大切です。これができれば農場は立ち直ります。また、今の状態を脱出したあとには、良い農場に成長します。

⑤豚の管理

PRRSやApp、マイコなどの清浄化をいきなり考えず、前述したように、まず清潔にすることが先決です。目につくゴミをなくしてください。豚舎の外もなかも綺麗にして、ホコリが少ない農場にして下さい。このレベルの農場は、カーテンや天井、ピットなどのすき間風が入ってくる状況が多いので、底冷え、腹冷え、風によるストレスなどがかからないように工夫しましょう。

⑥病気の管理

事故率15%を超えると、何をやっても効果がありません。やってもやらなくても同じならやめるほうがお金がかからなくて良いと思うことがありますが、少しでも前進するためには、母豚のワクチネーションをきちんと行い、母豚の免疫安定を図って下さい。子豚のワクチネーションについてはケースバイケースですが、別のことにお金、時間を割いたほうが良いことが多いです。すぐに結果はできませんが、母豚の免疫

表3 病気の管理

農場内にある病原体を確認する どのステージでどの病原体が動いているか確認する 発病パターンを見つける 候補豚のワクチネーション・馴致 母豚のワクチネーション いくつかの発病パターンを1つずつ解消していく
--

安定化は病気対策の基礎になります。それができないと一時的には良くなっても長続きしません。3年後の農場ではワクチネーションにより免疫が安定した母豚が大半を占めるようになり、疾病も落ち着いてきます。



以上2回にわたり、事故率から見た農場の対応ポイントについて述べました。

養豚経営には、「人の管理、豚の管理、病気の管理」があり、ここでは述べませんが資金管理も重要です。これらが十分に管理されている農場ではじめて優良経営ができていていると思います。既に、各項目について事故率の所で述べましたが、再度補足します。

おわりに

今回のシリーズは、ボトムアップをテーマに色々な角度から出荷頭数を多くする技術について紹介してきました。日本の1母豚当たり平均年間出荷頭数が18頭を割り込み、各地で病気による被害と育種による産子数の少なさを嘆く声が聞こえてきます。

それらのことは、間違いではないと思います。しかし、それらを言い訳に、対策をとろうとしていないようにも感じます。昨年訪問したフランスの農場は、7年前までは事故率15%で苦慮していました。主にサーコウイルスによる被害で苦しんだそうです。しかし、訪問時の事故率は3%を切っていました。

それまでに実施したこととしては、分娩舎・離乳舎の改築、未熟だった外国人労働者から訓練を受けた専門従業員への変更、洗浄・消毒の徹底、オールイン・オールアウト、ピエトレン種の導入、ワクチネーション、などでした。ワクチンはあくまで補足であることも強調していました。

成績の低下を病気や種豚に責任転嫁をせずに、基本に戻り、自農場をもう一度見直して考えて下さい。